

がん社会 を診る

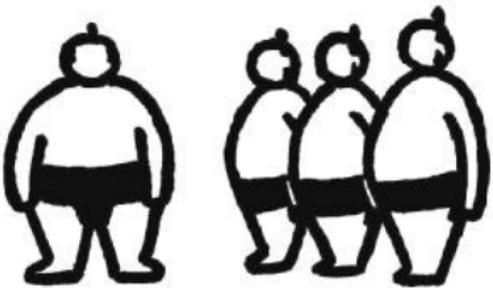
中川 恵一

61歳の若さで膵臓(すいぞう)がんのため亡くなった元横綱千代の富士の九重親方は7月の名古屋場所に姿を見せていました。体重も100^キを割っていたようです。

相撲を愛したその姿勢は、62歳で直腸がんのため死亡した北の湖親方に通じます。千代の富士と並び「昭和の大横綱」と呼ばれた北の湖親方は昨年11月の九州場所に日本相撲協会の理事長として臨みましたが、千秋楽の2日前に亡くなりました。お二人とも死の直前まで角界に寄り添った人生といえるでしょう。

がんという病気には「長く苦しむ」という印象があるようですが、実際には、全身転移などかなり進行した状態でも、比較的長い間身体の機能は保たれます。

緩和ケアを適切に施せば、症状もほとんどない時間を長く過ごせることが、ふつうで



イラスト・中村 久美

「力士短命」対策待ったなし

す。最後の数週間から数日で急速に悪化することが多いので、多くの日本人が希望する「ピンピンコロリ」に近い経過が得られます。

大横綱2人を60歳そこそこの若さで失ったことは残念でなりません。力士の短命は大問題です。1980年から2002年までに亡くなった幕内経験力士100人の死亡時の平均年齢は63・6歳というデータも取り沙汰されています。

横綱の寿命はとくに短く、69連勝を誇る双葉山は56歳、「柏嶋時代」の柏戸は58歳で亡くなっています。還暦土俵入りをしたのは1937年以降10人に過ぎません。

力士にとっての最大の健康リスクはなんといっても、肥満と糖尿病です。糖尿病を患うと、膵臓がんのリスクは1・85倍、大腸がんでも1・4倍に増加します。

日本人を対象にした調査でも、肥満指数(BMI)が27以上の男性では大腸がんなどが増えることが分かっています。大型の力士が増えて、幕内力士の平均体重は50年前より40^キも増えて160^キを超えています。BMIの平均も46程度ですから、力士の健康に影響するのも当然だと思えます。

リオ五輪が幕を閉じましたが、オリンピックの格闘技は体重別が原則です。その点、大相撲は「無差別級」ですが、力士の健康面からの議論も今後、必要になってくるかもしれません。